

# 現代英語における“wring one’s hands”の 意味変化とイディオム化

渡 辺 拓 人

## 要 旨

本稿では、現代英語において“wring one’s hands”が経た意味変化とイディオム化を取り上げる。この表現は、13世紀以来「手を揉む」という意味の身体表現として用いられてきたが、現代英語では「傍観する」というイディオムの意味をもつようになっている。本稿では特にその歴史的側面に注目し、イディオムの意味は20世紀中頃から出現したことを示す。また、イディオムの意味が「(悲しみのしるしとして)手を揉む」>「悲しんでいるだけで何もしない」>「傍観する」という段階を経て発達したことを事例の分析を通じて明らかにする。

キーワード：身体表現 (body language)、イディオム (idiom)、イディオム化 (idiomatization)、意味変化 (semantic change)、現代英語 (Present-day English)

## I 序論

“wring one’s hands”（「手を揉む」）は英語の歴史において少なくとも13世紀初頭から用いられている表現である。*Middle English Dictionary* (s.v. wringen 4(c)) の挙げる次の用例がもっとも古いようである（現代英語訳は筆者による）<sup>1)</sup>。

(1) c1225(?c1200) St.Kath.(1) (Bod 34)122/851: Heo...lokede azein-

1) 言及のない限り、引用文での太字による強調は筆者によるものである。以下同様。

wart...ant seh...wepmen & wummen, wið **wringinde** [Roy: grindinde] **honden** wepinde sare.<sup>2)</sup>

‘She looked back and saw men and women, with **wringing hands**, weeping sorely.’

中世から現代に至るまで用いられている身体表現としての用法は、(2)に引用する *Oxford English Dictionary Online* (s.v. wring, v. 3b.; 以下 OED) の定義が端的である<sup>3)</sup>。

(2) To clasp and twist (the hands or fingers) together, esp. in token or by reason of distress or pain.

この「(悲しみや苦しみのしるしとして、またはそれが理由で)手を揉む」という意味に加わったのが、本稿で取り上げるイディオムの意味「傍観する」であり、ちょうど日本語の「手をこまねく」に相当する用法である<sup>4)</sup>。この用法は20世紀末頃から辞書編纂者たちに認識され始めたようであるが、管見の限り、最初にこの定義を掲載したのは *Collins COBUILD English Dictionary*, 2nd ed. (1995, s.v. wring 2) および *Collins COBUILD Dictionary of Idioms* (1995, s.v. hands) である<sup>5)</sup>。同じ出版年・出版社でありながら記述が多少異

2) [ ] 内に示されている Royal 写本の異形 “grindinde” は写字生による置き換え (“a scribal substitute”) であり、頭韻の観点からは明らかに “wringinde” が正しい形である (d’Ardenne and Dobson 1981, pp. 280–281)。

3) この定義と用例は初版 (*New English Dictionary* のタイトルで出版された1928年) 以来まったく変わっていない。現在行われている第3版への改訂作業により、今後書き換えられる可能性はある。

4) なお、文化庁の「国語に関する世論調査」では、「手をこまねく」を「何もせずに傍観している」ではなく「準備して待ち構える」の意であるとする回答が近年増えているようである（「手を拱く」『デジタル大辞泉』）。

5) 現時点では「傍観する」の語義を載せている辞書はそれほど一般的ではない。確認したいくつかの辞書のうち、記載のあったものを以下に挙げる。英英辞典では *COBUILD* に遅れること3年、*Longman Idioms Dictionary* (1998, s.v. hands) が「傍観する」の定義を与えている (“to show or say that you are worried and upset about something, especially without doing anything about it”)。 *Oxford Advanced Learner’s Dictionary of Current English* では、第6版 (2000, s.v. wring) からこれに関連する記述が加わる (“to hold your hands together, and twist and squeeze them in a way that shows you are anxious or upset, especially when you cannot change the situation”)。英和辞典では『旺文社レクシス英和辞典』(2002, s.v. hand) がもっとも古いようである

なるため、それぞれの定義を (3a), (4a) に、用例を (3b), (4b-c) に引用する。

- (3) a. If someone **wrings** their **hands**, they hold them together and twist and turn them, usually because they are very worried or upset about something. You can also say that someone is **wringing** their **hands** when they are expressing sorrow that a situation is so bad but are saying that they are powerless to change it. (太字は原文)
- b. The Government has got to get a grip. **Wringing its hands** and saying it is a world problem just isn’t good enough.
- (4) a. If you say that someone is **wringing** their **hands**, you mean that they are expressing sadness or regret about a bad situation, but are not taking any action to deal with it. You usually use this expression to show your disapproval of them for behaving like this. (太字は原文)
- b. Yet while Europe faces its most barbaric conflict since the end of World War Two, the UN stands hopelessly on the sidelines, **wringing its hands** piously.
- c. Mr Ashdown has accused the Government of **wringing its hands** and doing nothing as the country’s jobless figures spiralled.<sup>6)</sup>

---

(「(両手をもみ絞って) 悲しみ・絶望を示す (だけで何ら行動を起こさない)」。この記述は『オーレックス英和辞典』(2008, s.v. hand) に引き継がれるが、第2版 (2013, s.v. hand) では、(4a) に引用した *COBUILD* の定義に基づくと思われる記述が加わる (「(両手をもみ絞って) 悲しみ [絶望] を示す (感情を表すだけで何ら行動を起こさないことを非難して用いることが多い)」。なお、『クラウン英語イディオム辞典』(s.v. wring) — 「傍観する」の語義は未掲載— では “wring one’s fingers” の形も併記されているが、現代では用いられない古い形である。さらにそこに挙げられている “wring one’s hands” の用例は、OED が (2) の定義の下に Edgeworth, M. (1798) *Practical Education* から引用しているものであり、現代英語のイディオムについての記述としては不適當であると言わざるを得ない。

定義を見ると、(3a) は悪い状況についての心配やいらだちといった感情を示す身体表現としての用法への言及に始まり、その状況について何も行えない様子を表すこと (“they are powerless to change it”) についても触れている。(4a) では、身体表現としての用法は省略され、悪い状況への悲しみや後悔という感情を表しながら何も行わない様子を述べる用法 (“they ... are not taking any action to deal with it”)、さらにはそのような様子についての話者の批判的態度を表す用法 (“You usually use this expression to show your disapproval of them for behaving like this.”) が言及されている。(3b), (4b-c) に引用した用例からは、「傍観する」の意味では、もはや身体部位としての「手」が関係していないことが分かる。意味上の主語が国連や政府といった機関であることから文字通りの身体表現でないことは明らかであり、文脈からは話者の批判的態度を読み取ることも可能である。

以上をまとめると、悲しみや苦しみを表す文字通りの身体表現として始まった “wring one’s hands” は、そのような感情を表す比喩表現としても用いられるようになり、さらには悲しんでいるだけで何も行えない、あるいは行わないことを指す「傍観する」というイディオムの意味を発達させたと言えよう。本稿では特にその発達の過程を実証的に明らかにする。本稿の残りの部分は以下の構成である。II 節では調査に用いるコーパスを概観する。III 節では現代英語における “wring one’s hands” の用法を調査し、「傍観する」の意味でのイディオム性を確認する。IV 節では20世紀のデータを歴史的観点から扱い、そのイディオムの意味の発達を探る。また、イディオム化の観点から “wring one’s hands” の変化について検討する。V 節は結論である。

## II 調査手法

English-Corpora.org で提供されている次のコーパスを用い<sup>7)</sup>、“wring” の

- 6) この用例の後に “hand-wringing” と “wringing of hands” への言及もあるが省略する。
- 7) 本稿では、利用可能なコーパスについての制約と調査対象の一貫性の観点から、アメリカ英語に限って調査を行う。通時的観点でイギリス英語を含めることの可能性については脚注16を参照。

後ろ4語以内に“hands”が生起する用例を収集する<sup>8)</sup>。

- i. *The Corpus of Contemporary American English* (COCA) (Davies 2008-)
- ii. *The Corpus of Historical American English* (COHA) (Davies 2010)
- iii. *TIME Magazine Corpus* (TIME) (Davies 2007)

COCAは1990年から2019年までの30年間をカバーしており、各種書き言葉のジャンルに加えて話し言葉も収録した、10億語規模のアメリカ英語均衡コーパスである。まずCOCAを用いて現代における“wring one’s hands”の特徴を探る。ついで、通時の変化を探るために、アメリカ英語の史的コーパスCOHAを用いる。これも5つのジャンルからなるコーパスであるが、Ⅲ節で後述するように、「傍観する」の意味で用いられる“wring one’s hands”は、ジャンルとしては報道分野、文脈としては政治関係に多い傾向が見られるため、NEWSPAPERとMAGAZINEの2ジャンルに絞ってデータを収集する。それぞれがカバーする時代は、前者は1860年代以降、後者は1820年代以降である。サイズについては、前者はおよそ4500万語、後者は1億語以上である。できるだけ多くの用例を集めるために、アメリカで発行されている同名雑誌の記事からなるコーパスTIMEも併せて用いる<sup>9)</sup>。こちらは雑誌創刊の1923年から2006年までをカバーした1億語規模のコーパスである。

### Ⅲ 現代英語における“wring one’s hands”の用法

本節ではCOCAで収集したデータを用い、現代英語における“wring one’s hands”の用法の特徴を概観する。

まず、“wring”と名詞のコロケーションに着目する。第1表は、“wring”を中心語としてその左右4語以内に生起する名詞のうち、生起数の頻度順に

8) “wring”はレマ形で指定して検索する。この検索方法では“wringing of the hands”のような形やその他無関係の用例も収集されるが、全体に影響を与えるほどではないため、第1表および第2表に示す検索結果からは除外していない。

9) COHAにも*Time*の記事が収録されているため、一部にTIMEと重なる検索結果が出る。

第1表 “wring” の左右4語以内に生起する名詞 (COCA)

順位	名詞	生起数	MI
1	hands	787	7.52
2	neck	222	7.65
3	hand	157	4.56
4	water	85	3.55
5	necks	35	8.93
6	concessions	31	7.95
7	towel	31	7.05
8	heart	31	2.85
9	people	31	-0.36
10	money	27	1.47

第2表 “wring ... hands” のジャンル別頻度 (COCA)

ジャンル	生起数	100万語当たり
BLOG	83	0.65
WEB-GENL	90	0.72
TV/MOVIES	14	0.11
SPOKEN	88	0.70
FICTION	287	2.43
MAGAZINE	69	0.55
NEWSPAPER	70	0.58
ACADEMIC	18	0.15
合計	719	0.72

上位10語を並べたものである<sup>10)</sup>。生起数の観点からは“hands”が圧倒的に多い。相互情報量 (MI: Mutual Information) の観点からも hands と wring の結びつきの強さを見て取ることができる<sup>11)</sup>。表は省略するが、逆に“hands”を中心語に置いてその左右4語以内に生起する動詞を数えた場合でも、

10) 第1表では、“wring”と共起しうる名詞全体の中での結びつきの強さを見るために、左右4語以内という指定をした。

11) 相互情報量とは「中心語と共起語が互いに相手の情報をどの程度持っているかを示す値」である (石川 2012, 127頁)。MIスコアの算出はCOCAに付属の機能を用いた。

“wring” は生起数の序列では49位である一方、MI スコアでは2位 (7.5) となることから、やはり “wring” と “hands” の結びつきが強いことを確認できる。

次に “wring” と “hands” のコロケーションについて、ジャンル間に見られる差を概観する。第2表は “wring” の右4語以内に “hands” が共起する用例のジャンル別頻度を示している。一見して明らかなように FICTION での使用が他を圧倒している。(5a-e) から FICTION における特徴を見たい。

- (5) a. No one was there to greet Francesca when the plane arrived at T.F. Green Airport in Warwick, a few miles outside of Providence. This had been the cause of no small amount of consternation on the part of Roseanne, who **had wrung her hands** about it the entire day before her mother flew home. (2017, FIC, Bk: FrancescasKitchen)
- b. Adar can tell by the way he is **wringing his hands** that he wants to say something but is too anxious to broach the subject. (2018, FIC, The Dalhousie Review)
- c. Niam **wrung his giant hands** nervously, but he translated the question. (2002, FIC, Bk: TeaTerrorists)
- d. “Oh, Alice... I must go to my cousin Alice, and little Mary...” She was half crying and **wringing her hands** as she ran around the cabin. (1991, FIC, Bk: NoGreaterLove)
- e. Margo **wrings her hands**, paces back and forth across the carpet. She shakes Chuck by the shoulders. “What if he’s dying?” she says. “What if he is?” (2015, FIC, GettysburgRev)

(5a) のように「心配する」の意味で、身振りを伴わない比喩表現として用いられることもあるが<sup>12)</sup>、大半は (5b-e) のように地の文で登場人物の仕草を描写する身体表現として用いられるケースである。その仕草が表す感情は (2) に引用した OED の定義の通り、心配や不安などネガティブなものが

少なくない。文字通りの身体表現であるので、(5c) のように “hands” に修飾語句を付ける (“giant hands”) ことも可能である。“wring one’s hands” と共起しやすい他の身体表現としては、(5d) のような「泣く」、また (5d-e) のような「動き回る」という表現が目立つ。前者は (1) に引用した13世紀の用例から続く特徴である。後者について補足すると、(5d) は船が沈みそのような場面 (元のテキストはタイタニック号のエピソードを下敷きにした小説である)、(5e) は飼い猫の様子を心配する場面であり、どちらの場合も「動き回る」は「手を揉む」と共に、不安な心情を効果的に描写している<sup>13)</sup>。

II 節で触れたように、「傍観する」の意味の “wring one’s hands” は NEWS-PAPER および MAGAZINE のジャンルで特に多く、政治に関わる文脈でよく見られる。下にいくつか引用する。

- (6) a. While Washington **wrings its hands**, the Islamic State is making gains and it’s Iran that’s fighting back. (2015, MAG, News-week)
- b. What is needed, and what has been sorely lacking from Republican leaders, is a realistic plan for overhauling the entire federal tax structure. They had a splendid opportunity in 1995, right after they won control of Congress. ... But the Republicans never got behind one single plan, and that gave the Democrats time to cast them as favoring “tax cuts for the rich.” The Republicans have been so frightened by the Democratic attack that they have walked away from the solution to their problem and began **wringing their hands**. (2000, NEWS, Chicago)

12) Matsumoto (2008, pp.157-158) は「悲しむ」を意味する “wring one’s hands” の18世紀の用例を挙げ、このように文字通りの身振りから拡張した意味を「意味をもつ身振り」 (“meaningful gestures”) と分類している。

13) 言語表現ではなく身振りとしての「手を揉む」の特徴として、東山・フォード (2016, 211頁) は、「気持ちが悪く落ち着かない」「心配する」といった様子を表す際には「歩き回るなど他の動作を伴って使う」と指摘している。

- c. African-Americans are not just standing on the sidelines and **wringing their hands**, but are active in virtually every facet of the multipronged effort to end the dying from slaughter, thirst, hunger and disease. (1994, MAG, Ebony)
- d. Physicians are **wringing their hands** in frustration at being unable to provide basic, preventive immunizations. Influenza, complicated by pneumonia, is the fourth-largest cause of death in this country. (2000, NEWS, Houston)

(6a-d) の “wring one’s hands” はいずれも何も行えない、あるいは行わない状況の描写と理解できる。どの用例でも主語は特定の個人ではなく、政府や政治家たち、また民族や職業グループといった集会的な存在である。(3a), (4a) に引用した定義ではこの特徴への言及がないので、付け加えてもよいだろう。(6a, c) のように対比や逆接の接続詞 “while” や “but” と共起して、「傍観する」の対極にある内容が文脈内で描写されることもある。“wring one’s hands” が (4a) の定義にある「批判」の意味まで表すかは文脈次第であろうが、(3b), (4b-c) の用例と併せて考慮すると、たとえば話者の観点から「正しい」とされる政策を実行していない政府への言及とといった文脈では、「批判」の意味合いが伴いやすいとしても自然であろう<sup>14)</sup>。

「傍観する」の意味で用いられる “wring one’s hands” のイディオム性について、Nunberg, Sag and Wasow (1994) の分析を参照しつつ検討したい。関係するのは、個々の構成要素から全体の意味を予測できるかという構成性 (compositionality) の問題である。たとえば “kick the bucket” (「死ぬ」) は、その意味を各構成要素に求めることができないため構成性を欠いている。“wring one’s hands” の場合も、「傍観する」の意味を “wring,” “one’s,” “hands” というそれぞれの単語から導き出すことはできない。この点において、「傍

14) SPOKEN のジャーナルに含まれる報道番組の書き起こしにも同様の特徴をもった用例が見られる。下の例はクロアチア紛争を伝える報道からである。

And while people go on dying, the Europeans go on **wringing their hands**. Here’s ABC’s Barrie Dunsmore. (1993, SPOK, ABC\_Special)

観する」の“wring one’s hands”は Nunberg, Sag and Wasow (1994, p. 497) が“idiomatic phrase”と分類するものに含めてよいように思われる。これを確認するための統語テストとして、彼らは修飾 (modification)、量化 (quantification)、話題化 (topicalization)、動詞句省略 (VP ellipsis)、前方照応 (anaphora) を挙げている。こうした統語操作が可能であれば、それぞれの構成要素が意味をもって互いに関連している、すなわち構成性を有していると言える (p. 503)。

COCA のデータからそれぞれの点を検証する<sup>15)</sup>。まず修飾について、“wring one’s”と“hands”の間に形容詞が1語入るパターンを検索したところ9件がヒットした。そのうちの1つは(5c)であるが、他の用例もすべて身体表現の用法である。量化については、“wring one’s hands”で本来表されるのは「両手」であり、手の数を問題にすることはないので、統語テストに馴染まないと思われる。また、話題化と動詞句省略のテストも COCA で関連する用例を見つけることができないので省略する。前方照応については、“wring them”の左4語以内に“hands”が現れる用例を検索したところ6件がヒットした。そのうちのひとつを(7)に挙げる。

(7) His **hands** shook as he **wrung them** together. “We’ve been friends for how long, Mick?” (2003, FIC, Analog)

(7)と同様、残りの用例も身体表現としての用法である。十分なテストとは言いがたいものの、上記の結果に照らすと、「傍観する」の意味で用いられる“wring one’s hands”は構成性を失ったイディオムであると考えてよいであろう。

#### IV イディオムの語義「傍観する」の発達

本節では COHA と TIME から収集したデータから、イディオムの意味「傍観する」の発達について調査する<sup>16)</sup>。検索のヒット数は、前者は119件、

15) 文法性のテストについてコーパスから確認できることは限られており、母語話者の判断に頼ることが必要であるが、時間的制約から本稿ではそれを行っていない。

後者は115件である。

両コーパスからこの新たな意味が出現した時期を探ると、20世紀中頃までさかのぼるようである。検索結果の中でもっとも古い用例を(8)に引用する。

- (8) The grim fact is that war-needed food is going to waste. But even grimmer are two other facts:1) the Administration, after **wringing its hands** for ten years over problems of migrants who, like waves of misery, used to follow the crops, has awakened too late to the fact that the Joads are immobilized by lack of tires or are abandoning their calling for lush war jobs; 2) next year will be even worse. This week the Government haltingly moved to save what could be saved. It rounded up 183 migrants in the Virginias, put them on buses and trains for New York orchards, looked for more recruits in Ohio and Tennessee. Next week it hoped it could begin importing 5000 Mexicans. Cost of these “pilot programs”: \$500,000. (1942/9/14 [TIME])

この引用は、戦時下のアメリカで、例年のない大豊作の収穫期に季節労働者が不足していることに関連して、政府の対策の遅れを批判的に伝える内容である<sup>17)</sup>。“problems of migrants”が具体的に何を指すか、この記事の内容だ

16) 本節でもアメリカ英語を対象に調査を行うが、「傍観する」の語義がアメリカ英語発祥であると主張する訳ではない。1803年から2005年までをカバーするイギリス議会議事録のコーパス Hansard (Davies 2015) を検索すると、下のように「傍観する」と解釈できる用例が複数観察される。イギリス英語との関係も視野に入れることで、より詳細な調査を行うことができるだろう。

Some provision must be made for this. It is not good enough for the Minister to say, “I have rung my bell for the Parliamentary draftsman. Now I am left **wringing my hands**. There is nothing I can do about it. (1949\_07\_25)

なお、この例のように、Hansard では初代イギリス首相 Robert Walpole が1739年のスペインへの宣戦布告で述べた “They now ring the bells, but they will soon **wring their hands**.” (Ratcliffe 2018, s.v. Robert Walpole, Lord Orford (1676-1745)) という一節（ここでは「悲しむ」の意味である）にちなんだ用例がしばしば観察される。

17) (8)の中ほどに出てくる “the Joads” は、Steinbeck, J. (1939) *The Grapes of Wrath* に

けでは定かでないが<sup>18)</sup>、全体としては、第2次世界大戦の勃発とともに農村部で深刻化する労働者不足に関して、政府の対応が後手に回っていることへの批判であると読める。政府の動きが遅いことへの批判は“has awakened too late”や“the Government haltingly moved”という言葉遣いに明らかである。この文脈で用いられている“wring one’s hands”は当然ながら文字通りの身体表現ではなく、また「悲しむ」のような比喻表現としても理解できない。「傍観する」の意味で解釈するのが自然であり、(4a)に引用した定義の通り、話者（この場合は記者）の批判的心情まで読み取れる。この時期ではまだ周辺の用法であるが、最初に辞書に採録されるおよそ半世紀前から観察されることは興味深い。

イディオムの意味の発達は、「推論の慣習化」(“conventionalization of inferences”; e.g. Bybee 2015, pp. 199–200) —ある言語表現を解釈する際に付随して行われる推論がその意味として定着するプロセス—の観点から説明できそうである。つまり、身体表現であれ比喻表現であれ、“wring one’s hands”は悲しんだり心配したりする様を表していたが、(4a)の定義にあるように、悲しむだけでその原因に対して何も行動を起こせない、あるいは起こさないことへ意味の焦点が移り、「傍観する」というイディオムの意味の発達につながったと考えられる。特に、主語が特定の個人ではなく、国や政府といっ

---

登場するジョード一家のことである。彼らは、ダストボウル（1930年代に大平原地帯で生じた砂嵐）に見舞われたオクラホマから、仕事を求めてカリフォルニアへ移住する農民一家である。

18) 季節労働者を確保するための組織がなかったことを指しているのかもしれない。庄司（1990, 75–76頁）は次のように述べている。

第二次大戦期にいたるまで季節移動農業労働者を組織的・系統的に募集する農場主団体は事実上存在せず、農場主は新聞広告、労働請負人、あるいは連邦・州政府の雇用機関に依頼して労働者を確保した。…戦時期には、政府が農場主団体の育成・結成に密接に係わり、カリフォルニア州では、1943年から47年間に新たに34の農場主団体が設立された。そして、ブラセロ計画がすすむにつれ、メキシコ人契約労働者が農場主団体を通じて供給・管理されるようになった。

ブラセロ計画 (the Bracero Program) とは、1942年に始まったメキシコ人労働者を受け入れるアメリカ・メキシコ間の協定であり、(8)の最後で触れられている5000人のメキシコ人はその第一陣であると思われる。

た機関や人の集合を表す名詞である場合には、感情の描写という解釈はさらに弱くなるだろう（例文（6a-d）とも比較）。

- (9) a. Upon the brokers’ exodus, the State would stand to lose perhaps \$30,000,000 in annual taxes. Worse, the bankers were **wringing their hands** over what would happen to downtown realty values. (1933/10/9 [TIME])
- b. “We have been overwhelmed with calls, and the schools also are **wringing their hands**,” said Lester L. Dobyns, program director of the branch of the Y. M. C. A. in West Twenty-third Street. “We hope to find some solution through a city-wide meeting.” (1946, NEWS, NYT-Reg [COHA])

(9a) は増税を嫌った株式仲買人たちが州外に流出したことを伝える記事、そして (9b) は大勢の退役軍人が大学に戻ってくることに伴い学生寮が逼迫する問題を伝える記事からの引用である。どちらの例でも“wring one’s hands”は「心配する」や「当惑する」くらいの意味で解釈するのが適当であろうが、同時に、「傍観する」というニュアンスを読み取ることも可能である。(9a)では、銀行家たちは不動産の資産価値に関して何かできる訳ではないし、また(9b)でも、解決策が見つかるまで何もできない状況である。このような文脈での使用を通じて「傍観する」という意味が発達し、慣習化へ向かったと考えられる<sup>19)</sup>。

最後に、イディオム化の観点から“wring one’s hands”の発達過程について検討したい。イディオム化について秋元(2002, 35頁)は、「イディオム表現は最初の段階では透明度が高い。従って、文字通りに近いものであったが、時間が経つにつれて、徐々に不透明性が高まっていく」と述べている。これまで本稿で見た“wring one’s hands”もまさにその通りの発達を示しており、20世紀中頃から「傍観する」という、本来の文字通りの意味からする

19) 話者の批判的態度を表す用法は「主観化」(subjectification; Traugott 1989)の観点から説明できるだろうが、ここではそれを指摘するに留める。

と不透明な意味が生まれた。そのイディオム性についてはⅢ節で確認した通りである。形式面に関して、秋元（2002, 36頁）は“lose sight of”を例に、イディオム化が進む過程で、動詞の目的語である名詞が名詞性を失い、冠詞が落ちたことを指摘している。また、身体部位を含む表現について Matsu-moto (2008, pp. 156-157) は、所有格代名詞を伴う“set one’s foot”では文字通りの「足」を指すが、伴わない“set foot”では文字通りの意味を失い、表現全体で「入る」を意味するイディオムになっていることを指摘している。“wring one’s hands”の場合はどうなのか、COCAで“wring hands”を検索したところ15件がヒットした<sup>20</sup>。そのうちのふたつを引用する。

- (10) a. While its NATO allies were pounding Belgrade over Kosovo, Greece stood by **wringing hands**, unable to appear decisive because of its sympathies for the Serbs. (1999, NEWS, Atlanta)
- b. Strange storms happen from time to time, and it is nothing to **wring hands** about.” (2012, FIC, Bk: BonesOldOnes)

(10a)は「傍観する」、(10b)は「心配する」の意味である。所有格代名詞を伴わない用例が極めて少数であるため確定的なことは言えないが、典型的なイディオム化の過程からすると“wring one’s hands”はまだその途中の段階であるのかもしれない。今後「傍観する」の語義がさらに定着し、一般化していくことで、所有格代名詞の消失という形式面での変化が生じる可能性もあるかもしれない。

## V 結論

本稿では、20世紀以降の英語における“wring one’s hands”を取り上げ、その意味変化とイディオム化に着目した。20世紀末以降の現代の用法をCOCAのデータから概観した後、イディオム的意味「傍観する」の発達をCOHAとTIMEを用いて探った。現代の用法については、「傍観する」の意

20) 検索結果には(1)のような「形容詞(現在分詞)+名詞」の形式も数例含まれるが、ここで問題にしているのは「動詞+目的語」の形式である。

味は NEWSPAPER および MAGAZINE のジャンルに多く見られることを確認した。その通時的側面については、もっとも早い用例は20世紀中頃から観察されること、そして新しい意味は推論の慣習化を通じて定着した、つまり「悲しんでいるだけで何もしない、できない」ことから「傍観する」というイディオムの意味が発達したと説明できることを示した。

(筆者は関西学院大学商学部助教)

付記：本研究は JSPS 科研費 19K00674 の助成を受けている。

#### 引用文献

- Bybee, J. (2015), *Language Change*, Cambridge University Press.
- Collins COBUILD Dictionary of Idioms* (1995), HarperCollins Publishers.
- Collins COBUILD English Dictionary*, 2nd ed. (1995), HarperCollins Publishers.
- d'Ardenne, S. R. T. O. and E. J. Dobson, eds. (1981), *Seinte Katerine: Re-Edited from Ms. Bodley 34 and the Other Manuscripts*, EETS SS. 7, Oxford University Press.
- Davies, M. (2007), *TIME Magazine Corpus*. <https://www.english-corpora.org/time/>
- Davies, M. (2008-), *The Corpus of Contemporary American English*. <https://www.english-corpora.org/coca/>
- Davies, M. (2010), *The Corpus of Historical American English*. <https://www.english-corpora.org/coha/>
- Davies, M. (2015), *Hansard Corpus*. <https://www.hansard-corpus.org/>
- Longman Idioms Dictionary*, (1998), Longman.
- Matsumoto, M. (2008), *From Verbs to Periphrastic Expressions: The Historical Development of Composite Predicates, Phrasal Verbs, and Related Constructions in English*, Peter Lang.
- Middle English Dictionary*, Online edition (2000-2018), University of Michigan Library. <https://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary/dictionary>
- Nunberg, G, I. A. Sag and T. Wasow (1994), “Idioms,” *Language*, Vol. 70, No. 3 (Sep.), pp. 491-538.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 6th ed. (2000), Oxford University Press.
- Oxford English Dictionary Online* (2000-), Oxford University Press. <https://www.oed.com/>
- Ratcliffe, S., ed. (2018), *Oxford Essential Quotations*, 6th ed., Oxford University Press. <https://www.oxfordreference.com/view/10.1093/acref/9780191866692.001.0001/acref-9780191866692>
- Traugott, E. C. (1989), “On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change,” *Language*, Vol. 65, No. 1 (Mar.), pp. 31-55.

- 秋元実治 (2002), 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房.
- 石川慎一郎 (2012), 『ベーシックコーパス言語学』 ひつじ書房.
- 『旺文社レクシス英和辞典』 (2003), 旺文社.
- 『オーレックス英和辞典』 (2008), 旺文社.
- 『オーレックス英和辞典』 第2版 (2013), 旺文社.
- 『クラウン英語イディオム辞典』 (2014), 三省堂.
- 庄司啓一 (1990), 「ブラセロ計画とカリフォルニア農業」『立教経済学研究』 第44巻第2号, 71-86頁. <http://id.nii.ac.jp/1062/00002210/>
- 『デジタル大辞泉』 (2001-), 小学館. <https://japanknowledge.com/contents/daijisen/>
- 東山安子・L. フォード (2016), 『日米ボディーク:身ぶり・表情・しぐさの辞典』 増補新装版, 三省堂.